



IUFRO-J NEWS

No. 45 (1992.3)

国際シンポジウム事務局デスクの26カ月

「森林経営・環境保全のための情報システムに関する IUFRO 国際研究集会」事務局総務を担当して

東京大学農学部 露 木 聡

はじめに

この IUFRO-J news にも何回か告知を載せて頂きましたが、森林計画学会、IUFRO S4.02.00 ならびに S4.04.00 主催の下に「森林経営・環境保全のための情報システムに関する IUFRO 国際研究集会」(Integrated Forest Management Information Systems—An International Symposium—)が1991年10月13~18日に茨城県つくば市の科学技術庁研究交流センターにおいて開催されました。参加者総数100名(国内75,海外25)、発表総数62件(口頭25,ポスター他37)という、事務局の当初の予想を少し上回る規模のシンポジウムとなりました。このシンポジウムの事務局を担当したのものとして、開催の記録を残すという意味で何か書いてほしいということでしたので、研究集会の準備・本番・後始末について、経過をたどってみようと思います。

シンポジウム開催まであと24~18カ月

このシンポジウムの主催者である箕輪光博助教授から、事務局の総務を担当してほしいと筆者が依頼を受けたのが1989年の暮れ、シンポジウム2年前のことだったと思います。一体国際シンポジウムの事務局というのはどのようなことをすればよいのか、まったく見当がつかなかったのですが、幸い、主催団体となった森林計画学会(旧林業統計研究会)には、1984年に同じ IUFRO 第4部会の国際シンポジウムを開催した経験があり、その当

時の各種文書などの記録を木平勇吉教授(農工大)がまとめておいて下さっていたので、それらを参考にしてゆこうということになりました。実際この記録には、いろいろな作業の計画をたてたり、海外に出す文書の雛形となったりと、いろいろお世話になりました。

さて、総務としての初仕事は、シンポジウムのおおよその開催時期と場所を決め、事務局を組織し、当面のスケジュールをたてることでした。1991年の10月、東大での開催を当初の案とし、事務局には次の方々をお願いすることとしました。木平・石橋(農工大)、内藤(宇大)小林・竹内(新大)、比屋根(岩大)、末田(名大)、田中(三重大)、西川・天野・沢田・白石・栗屋(森総研)、箕輪・山本・龍原・露木(東大)の各氏です。初めは東大での開催を考えていましたが、西川氏からの情報を得て、年があける頃にはつくばでの開催に決まっていました。主な理由は、科学技術庁研究交流センターを無料で貸していただけること、つくばで開催するとつくば科学万博記念財団の補助金を受けられる可能性があること、そして前回(1984年)が東京大学を会場にしたことなどだったと思います。

以上のような準備の下に、第1回の準備事務局会議が開かれました。会議ではまず、集会の名称と目的、主催機関を確認し、大会議長を木平教授にお願いし、会場を研究交流センターに決め、日程の検討を行いました。ここで第1候補を1991年10月13~18日、第2・3候補をその前後の週とし、会場の具合で確定することとしまし

た。さらに、おおよそのプログラム（各セッションのテーマなど）、エクスカージョンの日程の割り振りを行いました。それによると、初日（13日）は午後の登録のみ、2日目（14日）は、招待講演のあと全日発表、3日目（15日）は、午前発表、午後半日ツアー、4日目（16日）は全日発表、5・6日目（17・18日）はエクスカージョンとなっています。また、参加者総数を80名程度（うち海外から25名程度）、発表数を50件程度の規模のシンポジウムとし、参加者相互の交流を親密にできるような集会にしようという方針がたてられました。最後に、事務局の各分担と今後のスケジュールを決定し、いよいよシンポジウムに向けて作業が開始されました。

会議のあと、日程が第1候補で確定し、また宿泊・パーティーなどを一括してホテルグランド東雲にお願いすることなどを決めています。さらに、おおよその予算を計算し、つくば財団に補助金の申請書を提出しました。ここから補助金を受けることができれば、集会の運営が非常に楽になります。

シンポジウム開催まであと18～12カ月

林学会大会も終わり、そろそろとりかからねばということで、まず発行が予定より遅れている1stサーキュラーを印刷しなくてはなりません。ところで、シンポジウムを1回開催するために必要になってくる印刷物というのは結構な量があります。今回のように小規模なものでも、サーキュラーを3回、パンフレットを2回、プロシーディングスを2回、登録用紙、封筒、ポスター、プログラムなどの表紙、とこれだけ印刷しています。（プロシーディングスが2回というのは、当日会場で配布する暫定版と、シンポジウムの終了後発行する正式版を作ることにしたからです。）1回1回の部数はそれほどでもありませんが、種類数は規模の大小とは関わりないようです。これらの印刷物やプログラム・ガイド、参加者リストなどについて、今回は筆者がデザイン、レイアウト、版下作成を行いました。このような作業もやってみるとなかなか楽しく、性に合っているのではないかという気がしています。ただ、筆者と他の人の感覚（色づかい、デザインなどの）の間にはわずかなズレがあるらしく、少々欲求不満であったことは確かです。

閑話休題。印刷会社を選び、見積をもらい、1stサーキュラーの印刷があがったのが1990年6月の初めてでした。1stサーキュラーには、会議の目的と概要、発表者募集、そして予備登録のための葉書などを印刷しました。すると次は、このサーキュラーを誰に送るか、ということになります。つまり恐怖の参加登録者管理の話です。

参加登録者管理はシンポジウム運営の基礎となります。これくらいは始める前に筆者にもわかっていましたから、管理業務はしっかりやろうということで、研究室で購入していたThe CARD3+というカード型データベースソフトを利用することにし、データは全てここに入力することにしました。必要な、または必要となるであろう項目を設定し、カード画面を設計します。最初は必要であろうと思った項目でも結局使用しなかったり、初めはまったく思いもよらなかった項目が必要となってくことは一般的によくあることで、そのためにこういったソフトでは設計変更が自由にできるようになっているわけです。この機能は大いに利用しましたが、困るのは少数の例外や特例、臨時措置などといったデータベース上になかなか表現しにくい部分です。結局、全てをデータベースで管理しようという目論見は脆くも崩れて、色とりどりの付箋紙の花びらが咲いた登録用紙を綴じた分厚いバインダーを併用することになりました。恐怖の、というのはこのことで、いわば管理元帳が2種類あるわけですから、うっかりすると一方の変更がもう一方に記入されていない、といったミスが起りかねません。この点はもう少し改善の余地があったと反省しています。

この時期に、富士フィルムグリーンフェンドへの補助金申請を行っています。こちらは12月末に申請が認められて、このシンポジウムの2つめのスポンサーとなって頂きました。

ホテルの予約もこの時期に行っています。さしあたって取れるだけ取ろうということで、シングル30室、ツイン10室をシンポジウム期間中確保しました。

第2回日の準備事務局会議はシンポジウムまで間もなく1年という1990年10月の初めに開かれました。70名近くの予備登録をもとに、ポスターセッションを設けることとし、具体的なセッションの時間割、暫定プログラムの編成を行いました。各日の最初はキーノートスピーチを行うこととし、人選は箕輪助教授に一任されました。次いで、エクスカージョン担当者から計画案が示され、宿泊ホテル関係、2ndサーキュラー内容などの確認が行われました。また、参加費やエクスカージョン費の金額、各種締切日を決定し、サーキュラーに登録用紙（エクスカージョン・宿泊申し込みを含む）をはさみ正式登録を受け付けることとしました。

シンポジウム開催まであと12～6カ月

1990年10月の後半につくば財団補助金に関する説明会が開催されました。幸運にもシンポジウムの前年に当たる今年度から補助金の交付を受けることができたので、

ぜひ来年度も、ということでそのときのノートをみるとかなりいろいろメモがしてあります。今年度の申請書作成の時は、会計担当が決定していなかったので予算見積りに非常に手間取りましたが、来年度分は石橋氏に御苦労願うことになりました。

2nd サーキュラーは1990年12月中旬に完成しました。日本人向けに簡単な日本語版も印刷し、予備登録者を中心に発送を行いました。当初、正式登録申込の締切を1991年2月末日としていましたが、結局発表申込締切を4月末日に、参加申込は当日まで受け付けることにしました。これは2nd サーキュラーの発行が遅れたことによるものです。

第3回の準備事務局会議は1991年3月下旬に開催されました。予定ではここで一気にセッションプログラムを組んでしまうつもりでしたが、進行の遅れからそこまではできず、各セッションのタイトルと主な発表者を決めるところまでで、最終的なプログラム編成は総務一任となりました。口頭発表かポスターによる発表かは事務局が決定して本人に通知することになっていたのですが、あまり遅らせるわけにはいかなかったのです。この時点で50名近くの登録と40件余りの発表申込がありましたが、さらに事務局から発表者を増やすために働きかけを行うことになりました。また、Ice Break や Farewell Banquet などの行事の確認、会計報告が行われ、当初の予定のなかったシンポジウムのポスターを作成することになりました。さらに、シンポジウムの聴衆を募る意味で、都道府県林務課と試験場、営林局に案内状を送り、各機関1名は招待することにしました。エクスカージョン担当者からはほぼ最終案に近い計画案が示され、承認されました。

登録者には、申込内容を記載した登録確認通知を発送しています。この通知は、CARD 3+ のデータをテキストファイルで書き出し、それをWORDSTAR のデータファイルとして差し込み印刷させました。初めのうち印刷は電動タイプで行っていましたが、後にページプリンタで行っています。このWORDSTAR+ ページプリンタというコンビはとても強力で、さまざまな英文手紙類、プログラムなどの版下やシンポジウム当日の掲示物、名札、領収書などの印刷や、レタリングマシンとして非常に役に立ちました。

シンポジウム開催まであと6~3カ月

1991年の林学会大会が終わるとあと残すところ半年です。

セッションプログラムを確定し、最終サーキュラーの

印刷・発送を行ったのが5月末、それと同時にポスターを作成しました。どうせポスターを作るならきれいな方がよいからということで、A2版のフルカラーのポスターとすることにしました。さらに日本国内向けに最終サーキュラーの日本語版の印刷も行い登録者に発送しました。そして、前回の事務局会議の決定通り、都道府県他に参加依頼の手紙にこれらのサーキュラー、ポスターを同封して発送を行いました。

6月の初めに筆者はエクスカージョンの下見に行っています。まわったのは初日のコースでしたが、お世話になる茨城県林試の林公彦氏の案内で内藤・白石の合計4名でコース上のポイント間の走行距離・所用時間の計測、各見学地への挨拶と必要時間・見学内容の確認、昼食を取るレストランのメニューのチェック、宿泊ホテルへの挨拶などを行いました。初日の最後の見学地である里見村からホテルのある常陸太田市へ向かう国道349号沿いは、エクスカージョンが行われる10月中旬に「クリスト・アンブレラ展」が開かれることになっていて、下見を行ったこの時期には既に基礎工事が一部行われているのを見ることができました。これはちょうどよいコースだ、とエクスカージョン当日を楽しみにしていましたが、これが大誤算でした。というのは、6月と10月の日没時間の違いを考えていなかったのです。お察しの通り、当日アンブレラ展のあたりを通ったときには既に真っ暗で、車内灯を消したバスの窓の暗闇の向こうに、道路のすぐ脇の傘だけが黒々とシルエットを見せているだけというなんとも残念な結果となってしまいました。

教訓。下見は同じ季節にするべきである。

第4回の準備事務局会議は6月下旬に開かれました。この時点で登録者総数が約60名、発表が約50件、半日ツアーに30名余、エクスカージョンにも30名余の申し込みを受けています。また、ホテルの宿泊申し込みも確保部屋数を越えそうになっていました。この会議では話の内容がやや具体的になっています。ポスター会場でデモを行うこと、半日ツアーのおおよその計画、パーティの予算と内容、成田空港からの交通の問題、各セッションの議長・副議長の人選、招待講演者の費用や滞在費援助の人数の確認、各担当の予算計画などです。

シンポジウム開催まであと3~1カ月

前回の事務局会議の内容を受けて、このあたりでもう一度参加者に情報を送ろうということで、シンポジウム受付の詳細、発表者には発表セッション名と暫定版プロシーディングス用原稿について、ツアー参加者には注意事項を、そして個人個人の参加費の計算表を出力して送

付しています。参加費は当日支払ということにしたので、総額をあらかじめ知らせておいた方がよいと考えたために組み入れました。この手紙の印刷も WORDSTAR を利用しています。差し込みデータを使った文書内計算や条件分岐などの機能を利用して、参加者それぞれの申込内容に応じた文書を一人一人について印刷しました。また、セッション議長の依頼をし、承諾を頂いた方には担当論文のアブストラクトを送付しました。

この時期の仕事は、新たな参加者やポスター発表の受付、変更やキャンセル、プロシーディングス原稿の整理などが主なもので、期日が迫っている割には忙しいという感じではなかったような気がします。筆者の海外出張があったせいもあり、いわゆる嵐の前の静けさというやつだったのです。

シンポジウムまであと1カ月～1日

シンポジウム前最後の準備事務局会議が9月中旬に開催されました。これまでの会議は東京で行っていましたが、今回は会場の下見を行うために森林総合研究所で開催しました。この時点で参加申込総数85名(国内51, 海外34)、発表59件(口頭29, ポスター他30)、ツアー71名(半日39, エクスカーション32)、宿泊希望56名などとなっています。ここではまず、新たに森林総研から高橋・杉村・近藤・鷹尾の各氏に事務局をお願いすることにしました。その上で白石氏と総務で、当日の会場運営について具体的な仕事のパート別責任者と人員の割付、スケジュールをたてることとなりました。その後の打ち合わせで、まず交通関係については、ポスター展示用パネルの借り出しと返却、海外から13日に成田に到着する参加者はつくばまでの輸送を行うことになっていたためその出迎えについて。社交関係はレディースプログラム、半日ツアー、リフレッシュメント、ホテルとの折衝など。会場運営関係はポスター会場設営、運営と撤去、受付、スライド、会場内ユーティリティ、写真などといったパートを作り、責任者と担当者を決めています。次に、ポスター会場でパーソナルコンピュータを使ったデモを同時に行うこととなり、デモを依頼する研究者の検討及び使用パソコンの手配、セッションプログラムの最終確認、会計報告などが行われました。シンポジウム参加者に当日渡すいわゆるシンポジウムキットは総務が準備することになっており、ハンドファイル、筆記具セット(ネーム入り)、メモ帳、プログラム・ガイド、参加者リスト、暫定版プロシーディングスなどを内容として考えていましたが、さらに日本の林業の解説や地図類も加えた方がよいということになりました。そこで、

会議後検討した結果、解説書については国土緑化推進機構発行の英文パンフレット(Green Forever)を、地図類については、(財)国際観光サービスセンター発行の英文地図と英文案内(日本、東京)を購入することにしました。また、開催地であるつくば周辺の案内は、つくば市役所から案内パンフレット(和文版、英文版)と地図をわけていただきキットの中に入れることにしました。ホテル宿泊申込は予約数をはるかに越えていたために、他のホテルへの振替を含みホテル側との調整を総務で行うことになりました。ホテル側で対応して頂いた結果、最終的には全員が1つのホテルに宿泊できることになり、この点では幸運でした。

さて、この会議のあとからが忙しさの本番になってきます。まず、暫定版プロシーディングスの原稿をまとめ、印刷屋に渡します。各種パンフレットの手配、シンポジウム会場内レストランとはパーティやリフレッシュメントについての打ち合わせ、宿泊ホテルとは予約の追加やホテル・会場間の送迎バスについての打ち合わせなどがあります。シンポジウムプログラムや参加者リストの版下作り(変更があるためにぎりぎりまで作れないのです)、そのコピーと製本、そしてシンポジウムキットのカバン詰めがあります。また、名札作りや掲示物作り、ポスターのタイトル作りもあります。ポスター会場には画鋸やはさみなどの文房具を用意する必要があります。シンポジウム会場と玄関に掲げるための看板をレイアウトし発注する仕事もあります。さらに大事なものは、参加登録者の個人カードや参加費レシート、受付業務の手順書を作っておき、当日の受付で混乱のないようにしなくてはなりません。そして、こういった作業を全て東大で行ったために、荷物をまとめてつくばへ運ぶ準備をしなくてはなりません。こういつている間にも変更やらキャンセルやら新規申し込みやらがはいってきますので、その対応が必要です。もうひとつ、海外からの参加者に対し到着日時と便名の確認と、成田からつくばまでの交通手段を記した手紙を出しています。まさかこれら全てを筆者一人でやったわけではありませんが、周りの人を巻き込みつつ何とか準備の終わったのは10月11日ころだったでしょうか。この期間にユフロ活動協力基金への補助金の申請を行い、3つめのスポンサーとなって頂きました。

こんなふうに準備をしていると、ときどき、申込をしてくれた人は本当に来てくれるのだろうか、と心配になることがあります。特に海外の方の場合は、事務局からの手紙に反応がない場合などとても気になります。主催者の箕輪助教授もこの点が気になった模様で、連絡のなかった数人に直前になってFAXなどで確認した結果、

4名全員不参加となった国があり、さらに1名の計5人のキャンセルが確定的となりました。

シンポジウムが始まった……

折しも台風21号が前々日(11日)あたりから房総半島の南海上に停滞し強い雨が降り続いており、成田への飛行機が無事につくだろうかと心配された13日でしたが、幸いにも昼過ぎから空が明るくなり初め、雨も小やみになってきました。成田へ出迎えにいった人の話によると、飛行機は定刻に着いたそうでしたが、成田とつくばを結ぶ国道が土砂崩れで道が半分つぶれたり、家が崩れていたそうです。また、JRや京成線が止まり、交通手段が大混乱だったそうで、タクシーを捕まえるのに1時間以上並んだそうです。そんな中で、会計担当者が遅刻し受付開始が3時間近く遅れるといったハプニングがありました。無事に初日の受付とICE BREAKが終了しました。初日には約40名の方々がお見えになり、ICE BREAKでは早速あちこちに話の輪ができていました。

2日目、3日目、4日目と、始まってしまえばあとはどうにかなるものです。唯一の誤算は、当日参加された方が考えていたより多く、シンポジウムキットがわずかに足りなくなってしまったことでした。天気もそれほど崩れることもなく、特に東京とつくばの2グループに分かれた3日目午後の半日ツアーはよく晴れて、墨田川の川下りや東京タワーは好評だったそうです。最後のセッションの後、Recommendationを採択し、Farewell Banquetへと突入しました。演壇で挨拶して下さった方が驚かれるほど予想外に大きな会場で、料理なども豪華だった(うれしい誤算)ように思います。日本式の三本締めでお開きとなりました。

結局、前述のように参加者総数は当初の予想を上回る

100名。オーストラリア、オーストリア、ベルギー、カナダ、中国、フィンランド、ドイツ、イラン、日本、ニュージーランド、ルーマニア、スリランカ、台湾、タンザニア、タイ、アメリカ合衆国の計16カ国からの参加を得ることができました。

5日目、6日目はエクスカースションで同伴者を含め約40名の参加があり、茨城県北部の林業経営の見学や、陶芸などを楽しんできました。

戦いすんで……

後始末の事務局会議が11月中旬に開催されました。各担当からの報告と会計報告が行われています。最後に残っているのが正式版のプロシーディングスの発行ですが、これは総務が行うことになっており、大体の編集方針が確認されました。できれば会議中のスナップ写真なども入れた方がよいのではないかということになり、現在その方向で進んでいます。というわけで、筆者にとっては最後の仕事、プロシーディングスの編集が今山場を迎えており、これがすむと長いようで短かった2年余が終わるわけです。

おわりに

以上、国際シンポジウムの準備から後始末までの約26カ月間について、総務担当者がいつ・何をやったかという点を中心としてまとめてみました。

最後に、今回のシンポジウムを実行するに当たってお世話になった方々に感謝します。

なお、現在編集中のプロシーディングスは、3月頃に森林計画学会出版局より発行の予定です。お問い合わせは、東京農工大学農学部環境・資源学科内森林計画学会出版局までお願いします。

「森林経営・環境保全のための情報システムに関する IUFRO 国際研究集会」に参加して

東京大学農学部 平田泰雅・増田義昭

はじめに

近年、熱帯林の減少にともない内外において官民を問わず、現存する森林資源の管理、環境保全に対する関心

が高まってきている。また一方において、コンピュータのめざましい発達により、高度情報化社会の時代が到来している。このような折、1991年10月13日から16日まで、つくば学園都市内の科学技術庁研究交流センター

において「森林経営・環境保全のための情報システムに関する IUFRO 国際研究集会」が開催された。このシンポジウムは IUFRO S4.02.00, S4.04.00 および森林計画学会の共催によるもので、世界各国から総勢 100 名の参加者が集った。これに引き続いて 17 日と 18 日の 2 日間はエクスカージョンで茨城県北部の荷見氏経営林・小池氏経営工場を訪問し、また笠間焼きを体験した。これは参加者の間の親睦を深めるための有意義な機会であった。そこで本報告では、シンポジウム、エクスカージョンについての話題を中心にして小生らの感想も交えて紹介することにしたい。

シンポジウム

今回のシンポジウムでは、「森林経営のためのコンピュータシステム」、「林分の管理と成長モデル」、「森林計画・森林経営一般」、「森林調査とモニタリング」、「森林計画手法」という 5 つのセッションで口頭発表が行われた。なかでも「森林経営のためのコンピュータシステム」のセッションにおいては、現在各国において積極的に取り組んでいるテーマであるということもあり、発表者に対し具体的な利用法からその背景にあるフィロソフィーに至るまで広範な質問や意見が出されていた。しかし残念ながら全体的には質疑応答の時間はあまり有効には活用されていないようであった。

今回の参加者は先に述べたようにいろいろな国々から来日されており、公用語となっていた英語もさまざまであった。日本人のたどたどしい英語、アメリカ人の流暢な英語を初めとし、「エイ」を「アイ」と発音するオージー・イングリッシュやアジアのアクセントの変わった機関銃のような英語まで皆とても同じ言葉を話しているようには思われなかったが、それでも外国人はどのような詭りであろうとはっきりと発言して、何とか通じさせてしまうところがすごいところだと思った。これは多民族からなる国家においては複数の言語が存在するため、自分たちの立場を守るためには例え自分たちの言語でなく流暢に話せなくとも、はっきりと躊躇せず発言することが要求されるためであると思われる。

ポスター・セッションでは、14 日と 16 日の 2 日間、約 30 編の発表が行われた。日本の研究者を中心として、収穫予測、生産予測に関するものや森林経営におけるエキスパートシステムの紹介、環境モニタリングの手法についてなど発表は多岐にわたっていた。これらの発表の中には森林情報のデータベース化を図るものや森林の管理・把握のため GIS (地理情報システム) を利用するというものなどのようにコンピュータでの大量のデータ



写真-1 研究交通センターで発表を行う参加者



写真-2 Farewel banquet で国際交流を更に高める

の処理が可能であるということをも前提とするものもあり、コンピュータがわれわれにとって益々身近なものになってきていることを感じさせられた。今回このポスター・セッションにおいて発表する機会を与えて頂いたが、専門的な内容に関する質問に対しては、日常会話程度の英語では十分に内容を説明することができず、語学力の必要性を改めて痛感させられた。

また会場では同時にコンピュータを設置してデモンストレーションも行われた。こちらはポスターによる発表よりもよりビジュアルで見学者の関心も高く、多くの質問がなされていた。なかでも GIS やリモートセンシングに関するデモは色もカラフルであり、ひととき人気を集めていたようである。

ポスター・セッションやデモンストレーションでは、図表やコンピュータのモニターにより視覚的に発表内容を理解することが可能であり、また発表者の方でもこれらを用いて説明することができるということと、またお互いの意志を伝え合うのに十分な時間がかけられるということのため、口頭発表の時よりもより活発な意見交換

がなされていたように思われた。

懇親会

10月16日の夜は、シンポジウムの成功を祝して盛大な Farewell Banquet が「ホテルグランド東雲」の宴会場で催された。非常に広い会場での立食パーティーであったが、シンポジウムを無事に終えた安堵感からか、和やかな雰囲気が漂っていた。会場のあちらこちらでアルコールのためか言葉の壁を越えて参加者同志が談笑しており、先ほどまでのシンポジウムでとは全く異なった人たちのようであった。最後に森林計画学会を代表して南雲秀次郎会長が、3本締めを外国人に“Three-time' Shime'”と説明して会を締め、大きな喝采を浴びていたのが印象的であった。

エクスカージョン

3日間にわたるセッションの後、10月17日朝、筑波のホテルから総勢約40人でエクスカージョンに出発した。私は、ある係の担当だった前日まではかわって少し緊張もほぐれ、観光気分でバスに乗り込んだ。この日は、茨城県久慈郡水府村、里美村で森林や林業の現場を見学した後、常陸太田市のホテルにチェックインするという予定であった。

途中、常磐自動車道で渋滞するなどしたが、お昼前には水府村の小池氏の製材、集成材工場に到着し、小池氏の考える「儲かる」林業、製材業の経営方針、戦略について話を伺った。氏の話をもとめると次のようであった。

・(製材業の長年の経験から、)節がなく、狭く均等な幅の年輪を持ち、丸くて真っ直ぐな木を育てるべし。

・立木を買うよりも、節の少ない根元の丸太を市場で買う方が得である。

・明確な目標を設定し適切な施業を行うことにより、長伐期で良質材を生産すれば、十分採算のとれる経営が成り立つ。

お話の後、集成材工場内を案内され、角材や板材の製材、木工家具の組立、集成材の加工などを見学した。

小池氏の工場を後にし、里見村に向かう途中でウッドィーハウス付設のレストランで昼食をとった。このころから雨が降り始め、里美村の公民館に到着した頃には完全な土砂降りとなっていた。公民館では、里美村長の荷見氏が私たちを出迎えてくれた。荷見氏の説明によると、里見村の森林は約1万ha、そのうち約60パーセントが民有林で残りが国有林、人工林率は77.2パーセントである。里美村の現状と課題について、荷見村長の話をまとめると、



写真-3 エクスカージョン：小池氏経営の製材所内のログハウスで説明を受けるツアー参加者たち



写真-4 ポスターセッション風景

・5ha未満の零細所有の兼業林家が大部分を占めているので、地域林業の中核的担い手である森林組合の機能の拡充と体質改善を図り、施業の委託を促進し、協業化、集団化を推進する必要がある。

・今後予想される国産材の産地間競争に対処するために、産業基盤の整備拡充による低コスト林業を確立するとともに、林業者の定住条件を整備して林業山村の活性化を図り、生産から流通加工にいたる一貫した地元材の安定供給体制を整備する必要がある。

・椎茸などのきのこ類を中心とした特産林産物の生産を推進し、林家の所得向上を図る必要がある。

このような説明の後、数台のワゴン、乗用車に分乗して里美村の森林を見学しに出かけた。あいにくの雨のため車から出てじっくりとという訳にはいかなかったが、杉の複層林などを15分ほど見学して戻った。この後、ホテルに向かったが、途中クリスト・アンブレラ展(クリスト氏による、日米2つの谷に同時に青と黄色の大型

の傘を何千も開いて展示する屋外芸術プロジェクト、途中で事故が起きて中止になったあれ)が暗くてよく見れなかったのが少し残念だった。

この晩の夕食会は大いに盛り上がった。これが、シンポジウム最後のパーティーだということもあってか、カラオケ大会あり、ニュージーランド(おそらくマオリ族)の儀式(日本の1本締め、3本締めのような酒宴を締めくくもの)ありで楽しい雰囲気うちに終わり、その後も酔っぱらったまま大浴場でわいわいと話に花を咲かせていた。

2日目、前日とは違って変わって澄んだ青空が広がる気持ちの良い朝であった。この日は、茨城県勝田市にある国営常陸海浜公園、笠間焼きが有名な茨城県笠間市を訪問し、つくばに戻るというコース。まずは海浜公園を訪れた。ここは、建設省が水戸射撃場跡地に建設した国営公園であり、約350haの面積を持つ。翼をイメージしたという大きなゲートに迎えられ、中に入るとまず1万人収容の“水のステージ”が目にはいる。遠足に来ている小学生たちがその池の周りを駆け回って遊んでいた。“大草原”と名付けられた芝生の広場には台風などによる9、10月の大量の降水のために水がたまり、大きな池のようになっていたが、正常な状態なら家族連れでにぎわう明るく美しい公園であるだろう。公園内は6つのゾーン(海浜ゾーン、砂丘ゾーン、草原ゾーン、スポーツゾーン、カルチャーゾーン、樹林ゾーン)に分けられており、その1つ樹林ゾーンはマツ林、オオウメガサ草の群落や湧水池での自然観察を主な目的としている。この公園を管理する建設省の人の説明によれば、この土地の本来の植生であるマツ林は何年前の松枯れ病の被害によってその多くが枯れてしまったが、その中で残った貴重な林が生かされるよう公園の設計をしたそうである。

その後大洗海岸にある休憩所で昼食をとり、笠間へと向かった。笠間稲荷神社で仲店をのぞきながらぶらぶらとした後、「製陶福田」にて笠間焼きに挑戦。6代目という御主人が愉快地に英語で2つの基本的なカップの作り方などを説明してくれ、私たちはそれを聞いた後さっそくオリジナル作品の製作にとりかかった。私は陶芸は初めての経験であったが、思わず熱中してしまった。いろいろな人の作品を見るとそこにその人の性格が現れているようでおもしろかったが、手先が器用で几帳面だと思っている日本人よりきれいに上手く作っている外国人もいて感心した。粘土遊びの次はお絵描き遊びで、すでに形のできあがった湯呑みやカップに葉で絵や文字を描いたが、私は粘土で作る方に熱中しすぎて絵付けの時間が

なくなり、今見ても恥ずかしいようなものになってしまった(子供の絵みたいだと誰かに言われた)。それについてもどんな風に焼き上がるだろうか、などと言いながら十分楽しんだという感じで笠間を離れつくばに戻った。

この最後のバス移動では、別れを惜しむといった感じで、母国の歌を歌い合ったり挨拶などがあった。各国の研究者は十分コミュニケーションをはかれたという思いであったと思う。

このエクスカッションでは、茨城県の森林及び林業を見学する一方で、海浜公園を訪れたり笠間焼きにトライするなど単調にならず、国内外の参加者を問わず楽しめるものであったと思う。移動のバス中でも、「ヤングクロップ! ヤングクロップ!」と一部ふざける人たちからかわれたこと以外は、相席の Eero P. Mikkola さん(フィンランド)とつたない英語ながらお互いの国のことなどを話し、有意義に過ごすことができた。ただ、いかんせん彼は身長が190cm位あるのでバスの席が大変窮屈そうで、気の毒であったが・・・。

おわりに

今回のシンポジウムにおいて英語でのタイトルは、“INTEGRATED FOREST MANAGEMENT INFORMATION SYSTEMS”となっていた。‘Integrate’とは「統合する」という意味であり、タイトルには世界各地で研究されている、あるいは実用化の段階に入っている森林経営のための情報システムを統合するという意味あいのほかに、研究者、行政官、林業経営者といった森林に携わる人々を統合するという意味も込められていたそうである。海外からの参加者の中には、日本から参加された方の案内で日本各地の森林を訪問された方もいらっしゃるようで、また、大学などで講演をされた研究者もいらっしゃるなど、シンポジウムの開催期間にとどまらず人的交流が図られたようであり、このシンポジウムにおいて広い意味での‘Integration’が達成されたように思われる。

今回筆者らがこのような国際シンポジウムに参加し、海外の人々と意見を交わすという貴重な体験ができたが、これはこの研究集会を成功に導いた実行委員会のご努力、各関連機関のご援助・ご協力、林業家の方々のご協力によるものである。

なお、本稿を書くにあたって、東京大学の箕輪光博氏、露木聡氏より貴重なアドバイスと資料を、また森林総研の高橋文敏氏からは写真を提供して頂いた。ここに心から謝意を申し上げる。

BIO-REFOR プロジェクト・ワークショップ開催について

IUFRO-Jnews No. 44 で既にお知らせしましたが、本年5月につくば市で「フタバガキ科樹木の種生態と増殖」をテーマに、以下の内容でワークショップを開催致します。

日 時：1992年5月19日(火)～21日(木)

5月19日：開会式及び公開講演会(参加費1,000円)

～午後1時30分開始、5時終了予定。

レセプション(会費10,000円)

～午後6時開始、7時30分終了予定。

5月20日：専門分科会(増殖及び菌根菌の2分野、参加費9,000円)

～午前10時開始、午後5時終了予定。

5月21日：専門分科会(続)、ワークショップ集約及び閉会式

～午前9時開始、11時終了予定。

午後～つくば学園都市内研究所の視察見学(午後3時解散)。

テーマ：「フタバガキ科樹木の種生態と増殖」

分科会1：フタバガキ科樹木の生物習性と増殖法

分科会2：フタバガキ科樹木の菌根菌接種法とその生
態

開催場所：茨城県つくば市 ノバホール インフォメーションセンター会議場

交通：①JR 利用の場合：

常磐線荒川沖駅下車、関東鉄道バス「つくばセンター行き」または「筑波大学行き」乗り換え、「つくばセンター」下車、徒歩3分。

②東京からバス利用の場合：

JR 東京駅八重洲南口から常磐高速バス「つくばセンター行き」、終点下車、徒歩3分。

主 催：IUFRO-SPDC, IUFRO-Japan

問い合わせ先：BIO-REFOR ワークショップ事務局長
河原輝彦
茨城県稲敷郡基崎町松の里1
森林総合研究所 (IUFRO-J 事務局内)
TEL (0298) 73-3211, 内線 248

《研究集会のお知らせ》

S2. 06-14 Complex Diseases (複合病)

広葉樹の糸状菌病害における生物的防除の役割; Dr. Krystyna Przybyl, Co-Chairman S2. 06-14, Institute of Dendrology, Polish Academy of Science, Parkowa 6, 62-036 Kornik, Poland/1992年5月, コルニック, ポーランド. (田村弘忠)

S5. 04:00 (木材加工)

フランス・ナンシーで開催されるユフロ第5部大会において、野口昌巳グループリーダーの司会による次のプログラムの講演がある。

8月24日 14:00～15:30

INVITED "Automatic Processing for Improved Quality Performance" (品質性能改良のための自動加工)

Howard N. Rosen 米国, 林野庁。

Voluntary 1 "New Techniques for Adaptive Control Optimization in the Wood Machining processes" (木材機械加工過程における適合制御最適化のための新技術) 田中千秋・島根大学。

Voluntary 2 "Expert Computer-Aided Optimizing System for Cutting Wood by Circular Saws" presented by Grigore Gogu. (コンピュータ駆使による丸鋸の木材切削最適化システム) Grigore Gogu ルーマニア, Transilvania 大学。

8月28日 10:30～11:30

Voluntary 1 "Composites for the Future" (これからの複合材料) Thomas M. Maloney 米国, ワシントン州立大学。

Voluntary 2 "Composites from Recycled Materials" (リサイクル原料からの複合材料) John A. Youngquist 米国, 林産研究所。 (事務局)

これからの研究集会予定 (IUFRO News Vol. 20 No. 3 より)

Division 1

- S1.07-05 (熱帯降雨林の天然更新), CTFT, MAB, FAO : Int'l Workshop on Management and Conservation of the Tropical Humid Forest Ecosystem (熱帯湿潤林の管理と保全の研究集会) / 12-16 Mar. 1990, French Guyana
- S1.07-00 (熱帯の造林) : Conférence des Responsables de la Recherche Agronomique Africains / 5-8 Feb. 1991, Ivory Coast
- S1.04-00 (自然災害) S1.03-02 (森林水文) : Symposium and Field Workshop on Natural Disasters (自然災害シンポジウム) / 2-16 Sep. 1991, Moscow and Alma-Ata, USSR; Lanzhou and Shanghai, China.
- S1.07-05 (熱帯降雨林の天然更新) : Networking in Tropical Forest Management (熱帯林管理のネットワーク) / 23 Sep. 1991, Paris, France.
- S1.04-00 (自然災害) : Symposium on Snow Avalanche Management, Landslide Prediction and Control (ナダレ管理, 地すべりの予知と制御) / 30 Sep.- 5 Oct. 1991,
- P1.13-00 (森林雑草管理) : Int'l Conference on Forest Vegetation Management : Ecology, Practice and Policy (森林植生管理の会議) / 27 Apr.- 1 May 1992, Auburn, Alabama, USA.
- P1.15-00 (アグロフォレストリー) : Int'l Agroforestry Symposium (アグロフォレストリーのシンポジウム) / Apr. - May 1992, Nanjing, China.
- S1.01-01 (生態系) : Methodology of Forest Reserves Research (森林保護研究の方法) / May 1992, Wageningen, Netherlands.
- S1.04-00 (自然災害) : Symposium on Erosion, Debris Flows and Environment in Mountain Regions (山岳地帯のエロージョン、土砂流と環境シンポジウム) / 5-9 Jul. Chengdu, China.
- S1.01-05 (景観生態学) : The Role of Landscape Ecology in Forestry (森林の景観生態学の役割) / Sep. 1992, Netherlands.
- P1.11-00 (地中海灌木生態系) (S4.02-01 (熱帯の資源資料) と共催) : Global Climate Change and the Tropical Rainforests (地球規模の気象の変化と熱帯多雨林) / 2-8 Aug. Ibadan, Nigeria.
- S1.03-00 (環境への影響) : Forest Meteorology and Hydrology (森林気象と水文) / 2-3 Sep. 1992, Eberswalde, Berlin.

- S1.05-06 (ヨーロッパのノルウェー スプルースの間伐試験), S1.05-03 (若齢林の取扱い), S2.02-07 (カラマツの産地と育種) : International Larix Symposium (国際的カラマツのシンポジウム) / 5-9 Oct. 1992, Whitefish, Montana, USA.

Division 2

- S2.04-07 (樹体細胞遺伝学) : 3rd Int'l Workshop on Trends in the Biotech. of Woody Plants (樹木バイオテクノロジーの情勢に関する第3回国際研究集会) / 25-29 Nov. 1991, Dehra Dun, Uttar Pradesh, India.
- S2.00-00 (森林植物と森林保護) : Inter-Divisional Sympo. on Non-Wood Forest Products (非木材林産物の部間シンポジウム) / May 1992, Taipei, China.
- S2.04-06 (林木の分子遺伝) : Molecular Genetics of Forest Trees (林木の分子遺伝) / 16-18 Jun. 1992, Bordeaux, France.
- S2.02-07 (カラマツの産地と育種) : Results and Future Trends in Larch Breeding on the Base of provenance Research (産地研究に基づくカラマツ育種の結果と将来の情勢) / 5-10 Sep. 1992, Waldsiefersdorf/Berlin, Germany, and Czechoslovakia.
- S2.04-05 (生化学育種) S2.02-00 (産地, 育種, 遺伝資源) : International Symposium on Population Genetics and Gene Conservation in Forest Trees 林木の個体群育種と遺伝子保全の国際シンポジウム / 24-28 Aug. 1992, Bordeaux, France.
- P2.05-00 (森林生態系に及ぼす大気汚染の影響) : Institute of Forest Botany and Forest Zoology of the Technical University Dresden : Air Pollution and Interaction Between Organisms in Forest Ecosystems (大気汚染と森林生態系の生物の反応との関係) / 100年大会につづいて 9-11 Sep. Tharandt/Dresden, ドイツ.
- P2.02-00 (早生樹種造林の生産力), P2.02-01 (ユーカリの生産力), P2.02-02 (針葉樹の生産力), AFOCEL : Mass Production Technology for Genetically Improved Forest Tree Species (遺伝学的に改良された樹種のための大量生産技術) / 14-18 Sep. 1992, Bordeaux, France.

Division 3

- P3.03-00 (労働科学) The future of the Forestry Workforce (林業労働力の将来) / 4-8 May 1992, Corvallis, Oregon, USA.

- S3.04-03 (作業研究 : 経費, 労働生産性) : Int'l Conference on current and future research &

development needs for the application of work study to forest operations (作業研究を森林作業に適用するための現在および将来の研究と開発の必要性に関する国際会議) / 10-12 Jun. 1992, Göttingen, Germany.

P3.04-00 (小規模林業), P3.07-00 (収穫と木材利用): Technical session at the Centennial meeting (100周年大会における技術部会) / 2-3 Sep. 1992, Eberswalde, Germany.

P3.06-00 (間伐の経済と収穫): 検討中 / Sep. 1992, Hungary.

P3.03-00 (労働科学): Joint Ergonomic Symposium (労働科学共同シンポジウム) / 1993, Kiev, Ukraine,

S3.05-00 (熱帯における森林作業): Forest Operations Research for Tropical Countries (熱帯諸国のための森林作業研究) / 1993(possibly April), Southeast Asia.

S3.06-00 (山岳林森林作業), S3.05-00 (熱帯における森林作業): Pakistan Forest Research Institute: Improving Planning, Road Building, and Harvesting Methods in the Himalayan Region (ヒマラヤ地域における道路建造と収穫法) / Spring 1994, Peshawar, Pakistan.

Division 4

S4.01-00 (測定, 成長, 収穫量), S4.02-00 (森林資源調査とモニタリング): Integrating Forest Information Over Space and Time (時空間的森林情報の総合化) / 13-17 Jan. 1992, Canberra, Australia.

S4.02-05 (リモートセンシングと地球森林モニタリング), Finnish Ministry of Agriculture and Forestry; Academy of Finland; Univ. of Helsinki; Finnish Forest Research Institute: Ilvessalo Symposium: National Forest Inventories (イルベッサロ・シンポジウム-国家森林資源調査法) / 17-21 Aug. 1992, Helsinki, Finland.

S4.02-00 (森林資源調査とモニタリング): History of Sampling, Data Collection & Remote Sensing for Resource Inventory & Monitoring (資源調査・モニタリングのためのサンプリング, データ収集, リモートセンシングの歴史) / 31 Aug.- 5 Sep. 1992, Eberswalde/Berlin, Germany.

S4.01-00 (測定, 成長・収穫量), S4.01-03 (設計, 性能と実験の評価), S4.01-04 (樹木・林分の成長シミュレーション・モデル), S4.01-06 (森林測定の器具と方法), S4.01-07 (林分動態モデルの設計, 実行, 評価): Long-term Experimental Sample Plots with Emphasis on Mixed Stand: Planning, Performance, Results (特に混交林における長期観測プロットと計画, 実行, 結果) / 2-5 Sep. 1992, Berlin Eberswalde, Germany.

S4.02-00 (森林資源調査とモニタリング), the Int'l Society of Tropical Foresters, Inc.; the Soc. of American Foresters; World Forest Institute; the Western Forestry & Conservation Association; and the American Soc. for Photogrammetry & Remote Sensing: Stand Inventory Technologies: An International, Multiple-Resource Conference (林分調査技術-多目的資源調査国際会議) / 13-18 Sep. 1992, Oregon, USA.

S4.02-01 (熱帯の資源情報): Resource Inventory Techniques to Support Agroforestry Activities (アグロフォレストリー-事業を支援する資源調査技術) / 1993, Palampur, Himachal Pradesh, India.

S4.02-00 (森林資源調査とモニタリング): Minimum Data Requirements for Sustainable Forest Management (持続的な森林管理のための最少必要データ) / Spring 1993, Oxford, UK.

Division 5

S5.04-06 (木材乾燥): 8th International Drying Symposium (第8回国際乾燥シンポジウム) / 2-5 Aug. 1992, Montreal, Canada.

S5.04-06 (木材乾燥) University of Agriculture (BOKU), Vienna: Understanding the Wood Drying Process: A Synthesis of Theory and Practice (乾燥工程の理解: 理論と実際の統合) / 18-21 Aug. 1992, BOKU, Vienna, Austria.

S5.00-00 (林産物): All Division 5 Conference (第5部会大会) / 23-29 Aug. 1992, Nancy, France. 同期間, 同地 S5.01-01 (木材形成), S5.01-02 (材質の自然変動), S5.01-04 (木材の生物学的改質), S5.01-05 (ユーザーが求める木材の性質), S5.02-00 (木材工学), P5.05-00 (年輪解析)等の研究集会。

Division 6

Division 4 (資源調査, 成長, 収穫量, 経営システム) and Division 6 (社会・経済情報システム, 政策科学), All-Union Research Institute for Silviculture and Mechanization of Forestry (VNIILM): Forest Management Under Market Conditions (市場条件下の林業経営) / Week of 23-29 Aug. 1992, immediately before the Eberswalde Centennial Meeting Pushkino, Moscow Region.

S6.12-03 (総合的土地利用と林業政策): Evolution of Land Use During the Last Century-What Does It Presage for the Future? (前世紀中に行われた土地利用は何を予言するか) / 30 Aug.-5 Sep. 1992, (at the Centennial Meeting) Eberswalde/Berlin, Germany.

連絡先, 1993年以後の研究集会については IUFRO News Vol.20 No.3 を御参照下さい。

(藤森隆郎, 山田容三, 西川匡英, 事務局)

“100年記念大会メモ”

IUFRO-News Vol. 20 No. 4 1991, 100年大会特集号がようやく届きましたが、そのなかで特に気付いた点を急ぎで紹介いたします。

登録申込書と登録料の受け取り専用窓口が開設された。

登録料は6月1日までに申込み受付分についてはDM 260。同日以降の申込みについてはDM 360、同伴者はDM 50。

30才以下の研究者および学生はDM 175であるが、5月1日までに組織委員会に申込みすること。

登録申込用紙はコピーでも受け取り可能。申込用紙と特集号はウィーン事務局か組織委員会に請求すれば入手できる。

OIUFRO 事務局

IUFRO Secretariat + (IUFRO Secretary)
(DI Heinrich Schmutzenhofer)
c/o Federal Forest Research Institute
Seckendorff-Gudent-Weg 8
A-1131 Vienna, Austria
Fax : + 43-1-829355
Tel : + 43-1-820151/-828370
(New fax and phone numbers)

probably as of July/August 92 :

Fax : + 43-1-8779355

Tel : + 43-1-8770151/-8778370

Tlx : 75312646 IUSC A

○ユフロ 100年祭組織委員会

Organisationsbüro “100 Jahre IUFRO”
Forschungsanstalt für Forst-und
Holzwirtschaft

Alfred-Möller-Strasse

D-O-1300 Eberswalde-Finow, Germany

Tel : + 37-371-65427, Fax : + 37-371-65213

Tlx : 162445

○登録申込書、登録料の受け取り窓口

CPO Hanser Service GmbH

Schaumburgalle 12

D-W-1000 Berlin 19

Germany

Tel : + 49-30-305 31 31

Fax : + 49-30-305 73 91

Tlx : 186111 cpo d

(事務局)

機会代表会議のご案内

平成3年度ユフロ J 機関代表会議を次のように開催しますのでお知らせします。

日時 4年4月3日(金) 12:00~13:00

場所 東京農業大学図書館第1会議室(1F)

- 議題
- 1) 平成3年度事業報告
 - 2) 平成3年度会計報告
 - 3) 同 会計監査報告
 - 4) 平成4年度事業計画
 - 5) 平成4年度予算案
 - 6) その他

各機関には万障お繰合せのうえご出席下さるようお願いいたします。

事務局からのお知らせ

ユフロ・J では昨年の機関代表会議で、100記念大会への会費参加助成を行うことを決めています(J NEWS No. 42)。来る4月の代表会議で具体的な実施案が計られる予定ですので、会員への通知や助成申込の受け取り業務は4月中旬からとなる見込みです。

IUFRO-J NEWS No. 45

平成4年3月10日

編集・発行：国際林業研究機関連合

日本委員会事務局